

問一

日本の伝統文化の継承を期待したい現代の若者が、日本の古典芸術には関心をもっていないのに、西欧の古典芸術には理解を示す、倒錯した状況があるということ。

（解答欄 3 行）

問二

伝統を有り難がる態度が断たれ、教養も失われた現代の状況を逆手にとり、むしろ強い気概をもって、因襲から解放された自由な視点で、既存の伝統よりも優れた芸術を新しい伝統として創出していけばよいということ。

（解答欄 4 行）

問三

伝統主義を排する姿勢を保とうとしていたが、伝統とされてきた作品に触れるうち、いつしかそれらがまとう観念的な価値に自らの率直な判断を曇らされていたから。

（解答欄 3 行）

問四

本物の芸術は、伝統的な価値観や知識が醸し出す権威的な雰囲気には依拠せず、ごく素朴な態度で、作品それ自体の姿や形をありのままに受けとめさえすれば、鑑賞者の心を強く揺さぶる感動をもたらすものだけということ。

（解答欄 4 行）

問五

旧来の価値観によって権威づけられた枠組のなかで、教養として「美」を捉え引き継いでいこうとする事の愚かさを弁え、自らの無知を新しい芸術を生み出していくための条件である無垢と捉え直し、何ものにもとられない純粋な直感を信じて芸術に向き合おうとするもの。

（解答欄 5 行）

問一

特定の文化圏の生命観や歴史意識を背景として、一つの物語が新たな物語を気ままに増殖させていくという発想法。

（解答欄 2 行）

問二

書物の全体を理解し的確に要約する友人の積極性に対して、自己逃避的な動機から、書物に刺激された特定の想念を漫然と膨らますという読み方しかできなかったから。

（解答欄 3 行）

問三

読書においては、自己の主観を対象化して他者の精神に触れ、得られた客観的な知識を実践へつなげていくべきなのに、書物の体系的読解よりも、自己の想念の恣意的な動きに無意識のうちに耽溺するのが筆者の読み方だったから。

（解答欄 4 行）

問四

書物に耽溺することに必然的に伴う内容の忘却は、学問や実務的必要の観点からは戒められるべきだが、読んだ内容を顕在的な意識からいったん消去する過程を経ないでは、自立した精神がなしうる創造的な読書は不可能だから。

（解答欄 4 行）

問五

読書は、書物の内容を客観的に理解することに尽きるのではなく、個々の読者が自らの人生のありように即した読み方を模索しつつ、読書に没頭する豊饒な時間を通じて、精神の創造性と自立を育む営みとしてあるもの。

（解答欄 4 行）

問一

歌は喜怒哀楽などの感情を詠んで、その思いを晴らし、聞く人の心を和ませるのが本来のあり方だが、歌合の歌は、互いに詠み競うことで、そこから外れたものになるから。

（解答欄 3 行）

問二

（2）

現存の歌人の歌を手直しすることも、自分に手直しを頼まない人に対して、面と向かって話題にして歌を修正せよなどと言うべきことでもない。

（解答欄 3 行）

（3）

手直しした本人はよいと思っっているだろうけれど、人はまたよいとも思わないこともあるにちがいない。

（解答欄 2 行）

問三

歌の末尾が「ふりける」だと眼前の景色を詠んだ表現となるが、「ふりつつ」だと雪が降る以外に何かが起こっている意味を含んでいるのに、それを表現しないままになり、含まれる意味に対して言葉が足りないようだという事。

（解答欄 4 行）

問四

とにかく古歌でも出来栄えがひどいと思うなら取り上げなければいいだろうに、勝手に手直しして古歌の詠み手の意図と齟齬するばかりか、作品自体を台なしにまでもすることはとてもつまらないことであるようだ。

（解答欄 4 行）